

文化・芸術

「静物（傘、買物籠、果物）」

1960年、油彩・カンバス
60・6^{1/2}×45・5^{1/2}（加賀家遺族寄贈）

加賀孝一郎（1899～1988年）

本作の裏面には次の一文が記されています。「この作品が私ノ心ト眼ヲ勉強シマシタコトヲ師岸田劉生先生ニ感謝致シマス」

加賀孝一郎は、対象と真摯（しんし）に向き合い写実に徹した画家でした。名古屋の春陽会を拠点に制作を続けました。

加賀の芸術は、1918年19歳の初夏、紹介状すら持たずに岸田劉生のもとを訪ねたその時から始まります。以来、劉生を生涯の師と仰ぐようになります。しかし加賀は結婚のため24歳で名古屋に帰京し、また劉生も関東大震災の直後、京都に居を移し、29年には38歳で急逝してしまつたため、2人の直接の交流はほんの数年にすぎません。にもかかわらず加賀の絵画には、劉生がひたすら追求した「内なる美」に通じる世界が内在しているかのようです。

初代館長・大川栄二は、開館間もない90年、加賀の8人のご息女との出会いからこの画家を見いだしました。同年当館で企画展を開催し「静謐（せいひつ）な人間性を具現し得た作品」と評しました。（小此木）

《名画の扉》

大川美術館企画展「大川栄二生誕
100年記念 コレクターの目」から

